

源順と凡河内躬恒

— その和歌表現の関連性について —

西山 秀人

—

源順は延喜十一年（九二一）左馬助舉（攀）の男として生まれ、二十歳半ばにして『倭名類聚抄』を撰進、天暦五年（九五二）に撰和歌所の寄人となり『万葉集』訓読と『後撰和歌集』撰集の事業に携わった。以後、十世紀半ばから末にかけて文人・歌人として多彩な活躍を見せるが、その業績に比して官途はあまりにも恵まれず、永観元年（九八三）七十三歳をもって不遇の一生を終えた。天暦七年（九五三）に文章生となるまでは永らく学生のままであり、同十年ようやく任官した勘解由判官の職には六年間据

え置かれた。その後、僕夫と仰ぐ源高明の後押しもあってか、応和二年（九六二）に東宮藏人、同三年には民部大丞、康保三年（九六六）には下総権守、翌四年には和泉守に任ずるなど一時は比較的順調な昇進を見せるが、安和の変により高明は失脚。天禄二年（九七一）に和泉守の任果てて後、天元三年（九八〇）七十歳にして能登守に任ずるまでの九年間は散位のままであった。

それゆえに順の作品には自己の不遇・沈淪を慨嘆したものが多く、和漢にわたる順文学の一特質ともなり得ているが、とりわけ晩年の散位時代には、

①おまへのやり水にうかべるのこりの菊におもひあはす

れば、いづみばかりにしづめる身は^{はつかしく坊仙雅}かしふ

……かゝるまどるにきぶらふことさへまばゆけれど、

さもあらばあれと、人こそきゝてそしりわらはめ⁽¹⁾

(163、野宮庚申歌会序、貞元元年〔九七六〕十月二十

七日)

しもつふさのかみふちはらのすゑたかくだるに、
ナレ^雅

■^雅納言〔中宮大夫 坊仙雅〕のいへに〔男ども 坊

仙雅〕餞たまふによめるうた

②きみははや人なみ⁽²⁾にいでたちていづみにしづむ我
にあふなよ (270、天元二年〔九七九〕カ)

此哥をたてまつらする〔ついで 坊仙雅〕に、お
ほせごとのたぶる藏人につかはす

③ほどもなきいづみばかりにしづむ身はいかなるつみの
ふかきなるらん (294、天元二年)

のごとく、「前和泉守」のまま徒に朽ち果ててゆく自己の
境遇を「いづみへ泉⁽³⁾和泉⁽⁴⁾にしづむ」と自嘲した表現
が目につく。

順のこうした姿勢は諸先学によって「任官することへの
焦りの気持ち」⁽⁵⁾のあらわれ、「強い自負の反映」⁽⁶⁾などと評

され、とかく彼の人となり還元されることが多かった。

が、たとえば①では「浮かぶ」「沈む」の対義表現、②で
は「並々」と「波々」の掛詞、「波」「立つ」の縁語に加え
て「いでたちていづみにしづむ」という同音反復表現、③
では「泉」「沈む」「深し」の縁語関係を形成するなど、そ
れぞれ修辭面において一工夫施されており、彼の不遇意識
とその作品にみる遊戯性とは表裏一体の関係にあることも
看過されてはならない。

ところで、順と同様和泉国司の官歴を有する歌人に凡河
内躬恒がいる。躬恒は延喜十一年(九一一)正月十三日、
前官の丹波権大目の任期を終えると同時に和泉権掾に任ぜ
られた(『三十六人歌仙伝』)。が、任果てた後は延喜二十
一年(九二二)正月三十日、淡路権掾に任官する(勅撰
作者部類)。まで約六年間散位であった。その散位時代に
当たる延喜十六年(九一六)九月二十二日頃、躬恒は宇多
法皇(石山御幸)に供奉し、翌日「御舟にてせたにのぼらせ給
ふ」折、当時近江介であった藤原兼輔の計らいにより「く
りやぶねにのりておほんふねにぐしてさぶらふ」という光
榮に浴した。そこで、

(1) いづみにてしづみはてぬとおもひしを今日ぞあふみに
うかぶべらなる (躬恒集 IV 168 V 271)

の一首を奉じたわけだが、「和泉」に「泉」を響かせ「沈み果つ」「浮かぶ」の縁語とし、さらに「近江」に「逢ふ身」を掛け、沈淪から栄誉へという境遇の変転をうたうという手法は、まさに上掲順例の先蹤をなすものである。これは、単なる偶然とは思われない。順は、「いづみにしづむ」の句を中核に種々の技巧をちりばめるといふ躬恒歌の手法を撰取し、それを沈淪訴嘆に際しての一表現パターンとしたのではなからうか。そしてさらに、順の和歌表現をたどつてゆくと、そこには貫之詠のみならず躬恒の歌からの影響も色濃く認められるようである。『古今集』編纂に携わり、専門歌人として晴々しい活躍を見せながらも、官途の面では「いづみに沈む」という辛苦を味わうなど、自身とよく似た経歴を持つ先輩歌人躬恒に対して、順が敬慕の念を寄せていたとしても不思議ではなからう。

以下、本稿では順と躬恒の和歌表現の関連性を探りつつ、躬恒の歌ひいては躬恒その人に対する順の意識について考えてみたいと思う。

二

順と躬恒の作品の共通性を用語面から指摘するならば、まずは動詞「沈む」の多出という現象が挙げられよう。家集における用例数を一つの尺度として計上してみると、『順集』では和歌 6 (うち 2 例は長歌)、詞書序文 2 の計 8 例。いずれも沈淪の意を響かせた用法である。一方、『躬恒集』は和歌 5、詞書 1 の計 6 例⁽⁹⁾。うち、沈淪の意で用いられているのは後掲の 5 例である。ちなみに、除目に漏れた嘆きの歌が多い『元輔集』でも、沈淪を表した「沈む」の用例は後掲の 3 例にとどまる。その他、拾遺集時代に至るまでの歌人の家集を検索しても、同様の例は友則 1、忠見 1、元真 2、匡衡 1 と少なく、うち和歌用例は元真 1・匡衡 1 に過ぎない。以上の数値のみによっても順・躬恒両家集の特質が看取されよう。次に両家集の用例について、前引以外のものを挙げる。

『順集』

応和元年、勘解由判官の勞六年、いにしへになす

らふるに、かくしづめるひとなし、つかれたるむ
まのかたをつくりて、つかきの長官朝成朝臣にた
まふに、くはへたるながうた

④あらたまの としのはたちに たらざりし ときはの
山の やまさむみ……ふみ、ていでし みちはなを
身のうきにのみ ありければ こゝもかしこも あし
ねはふ したにのみこそ しづみけれ……はるはいつ
とも しらなみの なみち (坊統仙進)にいたく ゆきかよひ
ゆもとりあへす なりにける ふねの我をし きみし
らば あはれいまだに しづめじと あまのつりなは
うちはへて ひくとし きかは (坊統仙進)ものはおもはじ (118)

おなじとしの五月に、一条の大納言いしやまにま
うで、七日さぶらひたまふ、同日人の詩つくりう
たよむにたへたるあまたあり、いとまのひまに、
からのうた「つくり (統仙進)」、やまとうた よめる事お
はかるかぎりあつたる(坊)に、侍従誠信の朝臣さはりありてとまれり、
のちにかのうたどもをみて、みづからゆきてつく
くはへて (坊統雅)りてはべらて、これに又つくりくはへよとす、め

しむるに、なかにみかはの權守惟成、江山此地深
と云詩の客帆有月風千里仙洞無人鶴一雙といへる
と、内記源為憲がなぎさの院松坊統仙といふだいをよめ
る

⑤おいにけるなぎさのまつのふかみどりしづめるかげを
よそにやはみる (273)

といへる、ふたつの和すといへるわか

⑥ふかみどりまつにもあらぬあきあけのころもさへなど
しづみそめけむ (274)

『躬恒集』

うきしま

(2)いさやまたこのうきしまにとまりなむしづみつ、のみ
よをふればうし (IV 165)

(此十首は延喜十六年四月廿二日わたくしごとにつ
きていせのさいゝにまかりたるとき、すなはち寮頭
国中をつかひにて、くにの所々を題てよませ
たまふ)

(またこれもちにたてまつれる)Ⅰ

(延喜御時うれへふみたちてそうせよとおぼしく
て女ばうの本につかはしける)Ⅲ

(延喜の御時、みづし所にさぶらひしに、つかさ
めしの比ともにくれたりしかば、御らんぜさせ
よと思ひて、あるをんなくら人のもとにやりし)

Ⅴ

(3)みな人のはなのころもをきる中にひとりぞおい
てしづみはてぬる(Ⅰ6Ⅲ185Ⅴ2)

おほみゆきの後たてまつる歌Ⅴ

(4)ふな^{のち}おかのみゆきの^{のち}はよるべなみしづむとわび
しものを思らん(Ⅰ14Ⅲ193Ⅴ50)

おなし御時しづめるよしを思ひて、あるくら人に
つかはしけるⅠ273Ⅲ297

えきの御ときにみづしどころにさぶらひけると
き、しづめることをなげきてあるひとにおくりは
べりけるⅣ

(5)いづくにもはるのひかりはわかなくにまだみよし野、

山はゆきふる(Ⅰ4273Ⅱ88Ⅲ183297Ⅳ427Ⅴ1)

まずは『順集』の例について見てゆくと、④は応和元年
(九六一)、勘解由長官藤原朝成に官途の停滯を愁訴した
長歌。歌中波線部は、

a あしねはふうきはうへこそつれなけしたはえならず
思ふ心を

(拾遺集・恋四・893・不知／古今六帖・三・うき・1688)

を踏まえたもので、『憂きⅡ渠』という掛詞が「沈む」に縁
語としての機能を付与している。⑤・⑥は天元二年、一条
大納言藤原為光が石山に詣でて七日間参籠した際、為光の
息誠信は障りあつて同行せず、後に石山参籠中に人々が詠
じた詩歌を見て順にも歌をつくり加えよと勧めた折に、順
が参酌した門人源為憲の一首と順の唱和歌。⑤の為憲詠は
水面に映る松の緑に、緑衫を着て「六位にてのぞみならず
侍りける」(続詞花集⁸⁷⁷)己の影を見るところ。⑥の順
歌は詞書中に引かれた藤原惟成の「客帆有月風千里 仙洞
無人鶴一双」(新撰朗詠集・下・雑・山水・462・惟成「江

「山此地深」の句と⑤の為憲詠とを和して詠んだものだが、「あさあけのころも」に五位の当色を表す「浅緋の衣」と「朝明の頃」を、「そむ」には「初む」と「染む」を掛け、「深（緑）」「浅（緋）」「朝明の頃」「日（が）」沈み初む」という対義表現に加え、「深緑」「浅緋」「染む」という縁語関係を構築している。

次いで『躬恒集』の例だが、(2)は延喜十六年四月二十二日、私用で伊勢へ下向した際、国々の名所を題として斎宮に詠み贈った十首のうちの一首。「浮島」の「浮」と「沈む」を対比させる。(3)・(4)はⅠ類本とⅢ類本では同歌群中に置かれているが、(4)についてはⅤ類本の詞書内容を信じれば、延喜十八年醍醐天皇の船岡行幸後に詠まれた歌ということになる。「船岡」に「船」の意を響かせて「沈む」と縁語関係を形成するほか、散位に沈む身を「わびし」と慨嘆している点などは(2)の詠風に通じるものがある。(5)は詞書中の用例だが、重出歌および他依本では「またこれもうちにたてまつれる」(Ⅰ4)、「詞書ナシ」(Ⅱ)、「(献大内みしが歌)」(Ⅲ¹⁸³)、「延喜の御時に、みづし所にさぶらひしに、つかさめしの比とにをくれたりしか

ば、御らんぜさせよと思ひてあるをんなくら人のもとにやりし」(Ⅴ)と、内容に相違が見られる。ちなみに『後撰集』では「おなじ御時、みづし所にさぶらひけるころ、しづめるよしをなげきて、御覧ぜさせよとおぼしくて、ある藏人におくりて侍りける十二首のうち」(春上・19)とある。上掲Ⅰ²⁷³Ⅲ²⁹⁷が『後撰集』からの増補であること、Ⅳ類本すなわち西本願寺本の後半部が「こと本のすゑあるをかける」(Ⅳ²⁵⁴後の注記)増補歌群であることを勘案すれば、(5)の詞書用例を『順集』のそれと同一に扱うことはできない。

以上、前節で述べてきたことも含め、順の①・④・⑥、躬恒の(1)・(4)の例から看取されるのは、両者とも不遇沈淪の嘆きを率直にうたうことよりも、言語的側面に興味の中心を据えている点である。両者のこうした歌作態度は、たとえば元輔の、

つかさたまはらで、つかさめしのまたのひ、うち
の右近がもにつかはし、

はとしごとにたえぬなみだやながれつ、いとどふかくは
みをしづむらむ (元輔集Ⅰ8)

おの、みやの太政大臣のいへの、いけのほとりに
て、さくらはなを、しむ心よみはべりしに

さくらばなそこなるかげにおしまる、しづめる人のは
るかとおもへば (同 I 9)

としごろ、つかさえたまはらで、ねの日しに人
のゐていではべりしに

d たにふかみしづむためしにひかれつ、おいぬるまつは
ひともてふれず (同 I 175)

といった沈淪詠嘆歌から看取されるそれとは明らかに質を
異にするものである。順・躬恒の作には元輔歌のような沈
痛な響きがさほど感じられない。むしろ言語遊戯を駆使し
つつ詠歌することによって、己の憂さをはらしているとい
った趣である。いわば、自身の不遇・沈淪を和歌におい
て戯画化しているところに、両者の共通性が認められると
いってもよいだろう。

そしてさらに、上掲⑤の為憲詠、⑥の順詠に立ち返って
みると、両詠は躬恒の、

いり江の松 (I Ⅲ)

亭子院西川におはしましけるに、江老松といふ事

をつかうまつりける II

えのまつおひたり IV 26

いり江のまつおいたり V

(6) ふかみどりいりえの松としふればかげさへともに
おにけるかな (I 48 II 276 III 209 IV 26 413 V 69)
おい(他本)

(7) おいにける松もしるらんあゆかはのみゆきもかくはあ
らずやありけん (I 49 III 210 IV 27 V 70)

の二首を踏まえている可能性がきわめて強い。右の躬恒歌
は延喜七年 (九〇七) 九月十日に催された宇多法皇の大堰
川行幸に際して詠まれたものだが、老松を長寿の瑞相とし
て捉え、古の御幸に思いを馳せた両歌の表現を、為憲は我
が身の沈淪に引きつけて撰取したのではなからうか。ある
いは、為憲は為光の石山参詣を亭子院の大堰川行幸に見立
て、あえて躬恒の行幸和歌を模した歌を詠んだのではない
かとも推察される。順歌の⑥についても、躬恒の(6)と比較
すると「ふかみどり」を初句に据え「松」を詠んでいる
点、「陰さへ」「衣さへ」という類いの言い回しが見られる
点において、やはり躬恒歌を踏まえたものと考えてよさそ
うである。

ちなみに、小野泰央氏は⑤・⑥の二首について、『文選』

卷二十一・詠史所収、左太冲「詠史詩八首」中に見える、

e 鬱鬱¹澗底松 離離²山上苗 以³彼徑寸莖⁴ 蔭⁵此百尺

條⁶ 世胄躡⁷高位⁸ 英俊沈⁹下僚¹⁰（以下略）

からの影響を指摘されている。⁽¹⁾首肯すべき見解であろう。

この故事に加え、上掲躬恒歌をも念頭に置きつつ詠まれた為憲詠と、その典拠を喝破し、なおかつ種々の言語遊戯を施しつつ唱和した順詠。まさに師弟ならではの呼吸と、実力においては決して門人にひけを取らぬ順の面目がそこに窺われよう。

やや論旨からは逸脱したが、「沈む」の用法に話を戻せば、順・躬恒の作例はその趣向に等質性が認められ、順は躬恒歌を規範としながら上掲の歌文表現を形成していったことを予測させる。順は躬恒の歌さらには躬恒その人に対して、やはり特別な意識を持っていたように思われるのであるが、この点をさらに裏付けるべく、次節以降では他の順歌についても同様の検討を加えてみたい。

三

まずは「順集」所載歌の三分の一強を占め、また順の歌歴の上では大半が初期の作とみられる特殊歌群から見てゆきたい。

かはづ

⑦よの中はつねならなくなきもかくつれなき人を恋わ

たるらん（順集・続²³¹、物名歌）

書陵部蔵「続小草内和歌」（501・49）の巻末には「以他本自是奥入了」の注記のもと、天曆十年（九五六）十二月十日（二日カ）庚申夜、藤原輔相を追悼して詠まれた物名歌三十四首が増補されている。注記本文に記された「他本」に該当する伝本は現存せず、その性格も不明であることから、本歌群の信憑性を疑問視する向きもある。が、本歌群を通覧すると他の順詠に通じる特徴的な表現が随所に見出されること⁽¹²⁾から、やはり本歌群は順の手になるものと考えてよいであろう。

さて、当該歌は「かはづ」の題を隠しつつ「男女の仲は

所詮無常なものなのに、どうしてこのようにつれないあの人を恋い続けているのだらうか」と詠じたもの。上一句の表現をも含め、全体的に『万葉集』の、

f 如是為作 カクシニツツ 吾待印 ワガマシシ 有鳴 アラムカモ 世人皆乃 ヒトミタデ 常不在国 ツネナラナクニ

(卷十一・正述心緒・2585)

からの影響が色濃く窺われる。ただし、下句「つれなき人を恋わたるらん」という詞句は、おそらく

(8) なみだがはしのびくにながれつゝつれなき人をこひ

やわたらん (躬恒集 I 331 III 355)

(9) ちどりなくさほの川霧たちかへりつれなき人をこひわ

たるかな (古今六帖・一・きり・640・みつね 或本)

のいずれかに依拠しているのではなからうか。(8)はI類の光俊本、III類の書陵部丙本(501・235)ともに他本からの補遺歌群中に位置している。(9)は現存の『躬恒集』には見えない出典未詳歌で、「或本」が作者名を「みつね」とする根拠は不明である。したがって、(8)・(9)ともに躬恒詠と明断しうる確証はないが、少なくとも当時においては躬恒詠として享受されていたものと考えてよいであろう。当該歌が躬恒集歌と『六帖』所載の「或本」躬恒歌のそれと表現

的に密接な関連を有していることは注意されてよい。⁽¹³⁾

紅葉

⑧ 山のべもみちもみえずぞふりしける秋はてがたの木が
らしのかぜ (順集・続244・物名歌)

初二句に「もみち」の題を隠し、秋の終わりに吹く木枯の風によって山路には道も見えぬほど紅葉が降り敷いている情景を詠じた歌。第二句「道も見えずぞ」という歌句は用例未見であるが、その類例としては、

(10) きりくもりみちもみえずもまどふかないづれかさをの
やまぢなるらむ (躬恒集 IV 279)

の例を挙げることができる。右の躬恒集歌は霧が山路を隠すという発想だが、「道も見えず…」の詞句を第二句に据え、自然現象によって「山路」が隠されてしまう状況を詠じている点、当該歌との影響関係を想定しておいてもよきそうである。もつとも、(10)はIV類本すなわち西本願寺本系の伝本のみに存し、しかも同系では増補歌群中に置かれていたものだが、かといって(10)が躬恒詠であることを否定す

る根拠は今のところ見出し得ない。上掲⑦のようなケースも含め、以下とくに問題のない限りは、『躬恒集』所載歌をひとまず躬恒の自詠と見なすという立場をとりつつ考察を続けたい。

とこなつ

⑨ ひさかたの月ひととおとこなつかしきさまを雲ゐにみる
ぞかなしき（順集・続243、物名歌）

当該歌の表現をめぐって、旧稿では万葉語「月人男」の撰取と『万葉集』そのものとの関わりについて論及したが、その際に、

(11) ひさかたの月人おとこひとりぬるやどにないりそ人の
名たてに（躬恒集 I 382 III 406 IV 105 V 229）

g ひさかたのつきひととををみなへしあまたあるのべ
をすぎがてにする（昌泰元年〔八九八〕秋亭子院女郎

花合・（八番）右・十卷本16／新撰万葉集・下・女郎
歌・542、初句「夕方之」四句「生砥裳野辺緒」

の二首に注目し、当該歌の詠出に際して順が強く意識した

のは、

h 秋風之清夕天漢舟滂度月人壯子

（万葉集・卷十・秋雜歌・2043）

などの万葉歌よりも、むしろ平安時代に詠まれた上掲二首であつたのではないかという結論を提示した。(11)は『新撰

万葉集』所載の、

i 独寝屋門之自隙往月哉涙之岸舟景浮濫

（下・恋・448）

とも表現的に親しく、両詠の間に何らかの影響関係が存していたことを窺わせる。gは作者未詳の歌で、躬恒の「をみなへしふきすぎてくるあきかぜはめにはみえねどかこそしるけれ」（左・十卷本15／古今集・秋上・234・躬恒）と番わされているが、勝敗は不明である。十卷本と廿卷本とは下二句の本文が異なるが、いずれにせよ詠者の関心はあくまでも「ひさかたの月人男」という表現そのものの新奇さと「女郎花」との対義性にあったとみておいてよからう。「ひさかたの月人男」の歌句例は平安和歌では上掲三首を挙げるにとどまる点、当該歌の表現が(11)・gのいずれかに依拠した可能性は強いとみてよい。もともと、順がg

の歌合歌のみを念頭に置いて当該歌をものした可能性もなくはないが、ともあれ当該歌と躬恒歌との間に表現的共通性が認められることは事実であり、また注目すべき点でもあろう。

⑩ねをふかみまだあらはれぬあやめぐさ人をこひぢにこそはなれね（順集・17、あめつちの歌・夏）

上掲物名歌とほぼ同時期の成立とみられる「あめつちの歌」^⑪四十八首中の一首。「現れ」に「洗はれ」、「こひぢ（小泥）」に「恋路」を掛け、「根が深いのでその根がまだ地上に現れない——菖蒲草が小泥に漬かつて離れられないように、愛しい人を思う恋路に足をとられて抜け出すことができない」と詠んだ一首。「現れ」「洗はれ」の掛詞自体は、

い風ふけば浪打つ岸の松なれやねにあらはれてなきぬべらなり（古今集・恋三・671・不知、或人云人麿）

を先駆とするものだが、「菖蒲草」との配合では、
⑫ほとゝぎすけふとやしらぬあやめぐさめにあらはれ

てなきもこぬかな（躬恒集IV 269）

⑬五月雨の玉にぬくひをあやめ草ねにあらはれてなきぬべきなり（躬恒集II 95 III 84 / 古今六帖・一・あやめぐさ・101・躬恒）

といった躬恒歌との関係に留意される。ちなみに、後撰拾遺時代にかけて詠まれた、

権大納言びわ殿にかよひはじめて四日といふに

くわぎもこがねやのつまなるあやめ草ねもあらはれて、け

さやみゆらん（朝忠集I 35 II 56）

五月五日、ある人のつまにしのびて、いで、物

いひて、あやめぐさに書て

いわがやどのつまのみあらずあやめ草ねもあらはれてうれしからまし（為信集・49）

五月五日、郭公の心を

まけふとてや山ほとゝぎすあらはれてあやめのねさへき

けばなくらん（輔尹集・16）

の例は、朝忠詠くとの表現的関連がとりわけ密接な為信詠1を除けば、⑫もしくは⑬の受容例と見なしうるものである。当該歌上句の場合においても、右と同様これら二首か

らの影響を認めてよいのではなからうか。

また、当該歌の第四句「人をこひちに」についてであるが、この詞句を詠み込んだ先蹤歌としては、

(14)五月雨にみだれそめにし我なれば人を恋ちにぬれぬ日

ぞなき(躬恒集 I 187 II 104 III 92 IV 28 439 / 古今六帖・一・

五月・90・躬恒)

われやうき人をこひちになりぬればあはぬとだえに身をぞなしつる(延喜五年四月廿八日右兵衛少尉貞文歌

合・会恋・左・補1)

の二首が確認される。(14)は『古今六帖』所載の出典未詳

歌、

○五月雨に苗ひきううるたごよりも人をこひちに我ぞぬ

れぬる(一・五月・88)

と歌句の類似を見せるが、右歌が(14)の異伝であるとは考え難い。おそらく(14)は六帖歌〇と「みちのくのしのぶもぢずりたれゆゑにみだれそめにしわれならなくに」(古今六帖・五・すりごろも・3312 / 古今集・恋四・724・源融、四句「みだれむと思ふ」から表現受容を試みることで一首をものしたのではないかと思われる。順が(14)・〇のいずれに

依拠して当該歌下句の表現を構築したのかは判然としないが、「人をこひちに」の歌句例が他の同時代歌人詠には見られず、また上述したごとく上句に躬恒歌の影響が看取されることなどを勘案すると、(14)の躬恒歌を念頭に置いたという可能性は少なくないと思われる。

その他の特殊歌群についても該当例を求めると、「雙六盤歌」十五首には所見ないが、「碁盤歌」五十首からは次の五首を挙げることができる。

⑪たのみづのふかゝらずのみ、ゆるかなひとのこころの

あさくなるさま(順集・67)

延喜十七年屏風和歌、秋

おなじ齋院、もみぢかはにおちたり

(15)みづのおものふかくあさくも見ゆるかなもみぢのいろ

ぞふちせなりける(躬恒集 I 88 II 234 III 136 IV 101 481 V 25 /

拾遺集・雜秋・1132・(躬恒))

⑫ふりがたきこころのつねにこひしきをかりにもひとの

みぬはかなしな(順集・80)

⑬ おふれどもこまもすきぬあやめぐさかりにも人のこ
ぬがわびしき (躬恒集 I 249 II 226 III 273 IV 52 V 184 / 拾遺
集・恋二・768・躬恒)

⑭ なつくきのふかきねぎめをたづねつ、ふかくもひとを
たのむころかな (順集・91)

⑮ かれはてむことをばしらでなつくきのふかくもひとを
たのみけるかな (躬恒集 IV 434、下句 I 181「かりそめに
たにとふ人そなき」、I 294「ふかくも人のおもほゆる
かな」、II 97「ふかくも人をおもひけるかな」、III 318
「ふかくも人のおもほゆるかな」/古今集・恋四・
686・躬恒「深くも人のおもほゆるかな」/古今六帖・
六・夏草・3555「ふかくも人をたのみけるかな」)

⑯ うゑしにもあはずなりにしをやまだにあきのかりにも
こぬやなになり (順集・98)
たかふる

⑰ おりたちてうゑずはありとも (そとさくら) ^{そやまだの(V)} あきのかりに
はあはむとぞおもふ (躬恒集 IV 135 V 251)

〈参考〉

P あしひきのやまだのいねも ^{ひでにけり(II)} ひいでにけりうゑしにあ
はぬわがゝりにこん (家持集 I 186 II 234)

⑱ たれによりなげくとかみるかまどやまえもととりあへず
まどふこゝろを (順集・105)

⑲ たれにより思ひみだるゝ心ともしらぬぞ人のつらきな
りける (躬恒集 V 86 II 258 / 延喜十三年三月十三日亭子
院歌合・恋・左・十卷本 62・躬恒 / 古今六帖・四・ぎ
ふの思・2136)

以上、本節では『順集』所載の特殊歌を中心に躬恒歌と
の影響関係を探ってきたが、「物名歌」「碁盤歌」を除くと
躬恒歌の受容例と思しき歌はさほど多くはない。むしろ、
「あめつちの歌」の場合は『古今集』『後撰集』所載歌や
『古今六帖』所載の出典未詳歌からの摂取例が多く、上掲
⑩にみるケースもそうした先行表現の受容例の一端を示す
にとどまるものなのかもしれない。だが、質的に見れば、
順は躬恒歌の表現を摂取することにより、同時代和歌には

殆ど類例を見ない特徴的な詠風を創出し得ている点もまた事実なのである。換言すれば、躬恒歌の中でもとりわけ個性的な表現が順の歌作へと流れ込んでいるとささえいえる。

ちなみに、滝沢貞夫氏は躬恒の歌作態度について、「詠歌対象そのものを具体的に詳述しようとせず、技巧を凝らして外側からその印象を追い求め、醸成して行く」詠法で、「この冷静さが、意表をついた着想や、奇抜な機智・警句を生み出し、虚にして実をうがう歌の骨格となり得ている」⁽¹⁷⁾と述べておられる。また、片桐洋一氏は躬恒歌の表現について、「古歌のことばや当時流行していた歌語、あるいは自分が得意とする表現パターンを軽口的に駆使し、枕詞・序詞・縁語・掛詞などの和歌修辞で飾り立てることを好む」⁽¹⁸⁾と、その具体的特徴を明らかにされている。躬恒歌のこうした技巧的・遊戯的ともいえる歌風は、順歌のそれと軌を一にするものといつてよいであろう。たとえば、『躬恒集』には「蔓斑」「斑鳩二毛」「木綿髪」「足斑」「鹿毛斑」「青」「糟毛」の七種の馬毛の名を詠んだ物名歌が収められている(Ⅳ²⁴¹Ⅴ²⁴⁷Ⅴ¹⁵¹Ⅴ¹⁵⁷)¹⁹が、こうした意表をついた趣向性が、順の自歌合と思しき康保三年(九六

六)「源順馬毛名歌合」にそのまま踏襲されていることは説明を要しまい⁽²⁰⁾。この馬毛名歌合をも含め、上掲特殊歌を見る限りにおいて、順はどうやら躬恒の遊戯的・技巧的な歌風のある面では庶幾し、またそれにアレンジを加えつつ自身の詠作手法を確立していったものと推察される。さらにいえば、順にとって躬恒は、藤原輔相と同様、遊戯歌の先達として畏敬の念を起こさせるような存在であったのではないだろうか。

ところで、上述してきた順の歌作態度は、たとえば、

(右近少将義孝朝臣と「かゞのぞう(坊縁仙雅)」橘
正通と囲碁うちて、やまとうた十首をつのる、正
通(まけて(坊縁仙雅)「つぐのひ(仙雅) きたりてこふ仙
きたりこふ雅」に、四首をあたふ)

秋月

①⑥ ひさかたのそらさへするあきのつきいづれのみづに
やどらざるらん(順集・238、天禄二年(九七二)→天
延二年(九七四))

みづにやどれる月を

(20) ひさかたのあまつそらなる月なれどいづれのみづにか

げなかるらん（躬恒集 I 271 II 213 III 295 IV 107 V 169／拾遺集・雜上・440・躬恒）

のような私的な代作歌にも見出されるが、それにとどまらず、歌合歌や屏風歌などいわゆる晴の歌においても同様の指摘が可能である。以下、次節では紙幅の許す限り検討を加えてみたい。

四

山ぶき

⑰春ふかみ井出の川浪立かへりみてこそゆかめ山吹の花
（順集・185、天徳四年〔九六〇〕内裏歌合歌／拾遺集・春・68・順）

順が専門歌人として確たる地歩を占める契機となった天徳四年三月三十日内裏歌合の出詠歌。本歌合において当該歌は兼盛の「ひとへつ、やへ山ぶきはひらけなむほどへてにほふはなとたのまむ」（同歌合・八番・右・廿卷本16）と番わされ勝を収めている。とかく理のまされた印象を受けがちな順の歌作の中では、比較のおおらかな詠風を呈し

ているが、その表現構築に際しては、おそらく、

⑱春ふかみ^{春ふかみ}えださしひちて神なびのかはべにさける山ぶ^{山ぶ}

きのはな（躬恒集 I 125 II 27 III 13 IV 380／古今六帖・六・

山ぶき・3607・躬恒、初句「春ふかみ」

⑲なを、りて見てこそゆかめ花^{花の（他本）}いろをちりなんのちは何

にかはせん（躬恒集 I 170 II 81 III 70 IV 420）

の二首が念頭に置かれていたものとみてまず間違いないであろう。このように、一首の詠作に際して複数の躬恒詠から個々の表現を撰取したと思しき例は上掲⑩にも見られ、躬恒の歌に対する順の関心度の高さを窺わせる。

次に屏風歌について見てゆくと、村上朝に詠進されたとみられる五度の屏風歌からは該当例を探し得ないが、円融朝の天元二年（九七九）「宣言にてたてまつる御屏風歌」二十首においては躬恒歌との影響関係が顕著に認められる。以下にその例を挙げてみる。

はるの、のかすめるにむめのはなあり、こたかす
ゑたるひとゆく

⑳むめのかをかりにきてみる^{みる（他本）}人やあるとのべのかすみは

たちかくすらん（順集・277／拾遺集・雜春・1014・順、
初二句「梅がえをかりにきてをる」、結句「たちかく
すかも」）

本屏風歌の表現的特徴については既に旧稿⁽²⁰⁾で触れたが、
ここでは躬恒歌との関連に焦点をあてて論じてみたい。

⑮は諸本とも初二句の本文が乱れているが、『拾遺集』
の本文を原態に近いものと想定すれば、「狩に」と「仮に」を
掛けて、野辺の霞が梅花を遮り隠す理由について「かりに
来て」梅が枝を手折ってゆく人がいるからだろうかと忖度
した歌ということになる。霞が花を隠すという発想自体は
平安和歌の常套であるが、梅花を対象とした例は存外少な
く、先行詠では、

延喜十五年故斎院屏風歌 Ⅱ おなじ十五さい院の御屏風のうた巻 Ⅴ
閑院御屏風うた

(23) かをとめてたれおらざらん梅のはなあやなしかすみた
ちなかくしそ（躬恒集Ⅰ85Ⅱ200Ⅲ132Ⅳ303Ⅴ21／拾遺
集・春・16・躬恒／古今六帖・六・むめ・4139・（躬恒）
q かをとめてをりこそしつれ梅の花春の霞は立かくせど
も（延長八年以前）春近江御息所周子歌合・梅・1）

の二首を挙げるにとどまる。qは(23)の躬恒歌の焼き直しと
いうべき歌で、表現そのものは躬恒歌よりも当該歌に近
しい。確かに、当該歌の詠作に際して順がqのみを念頭に
置いていた可能性もないではないが、ここはむしろ、梅花
を隠す霞を「あやなし」と非難した躬恒歌に対して、春の
野辺を覆いつくす、いわば野の統括者としての霞の心情を
思いやつて詠まれたのが当該歌であったと考えておくべき
ではなからうか。

（まつのきにふぢかゝりたり、をとこをむなむれ
ゐたり、あるはをりてゆく）

⑲松風のおとにきゝつるふぢなみはをりつゝかへるなに
こそありけれ（順集・282）

⑳むらさきのふぢさくまつのこずゑにはもとのみどりも
みえずぞありける（283／拾遺集・夏・85・順）

⑲の上三句は「藤波」の波音を松籟に聞き紛う意と、評
判に聞いていた「藤波」の意を重ねているが、「松風の音」
すなわち松籟そのものを詠んだ例はあっても、それを

(ふかやぶ、ひとぎねぐして、だいまつを卅首
づゝよみ侍けるに、人しれぬこひを)

の一首を見出すに過ぎず、順は⑬の詠作に際して右の躬恒歌を念頭に浮かべていた可能性が強そうである。また、

⑳は松の緑をすっかり覆いつくすほどの藤花の見事な咲き
ぶりをうたうが、これと類似の表現・趣向を持つ歌として
は、

(25) むらさきのいろしこければふぢの花まつのみどりもうつろひにけり
 (躬恒集IV 177 V 279、延喜十六年辛多法皇)

石山御幸屏風障子歌／拾遺集・雜春・
1070・不知²²

の一首が挙げられる。右歌は松と藤の色彩を表すのに「紫」「緑」の両語を同時に詠み込み、しかも松を压倒する藤花を主題としている点において当該歌の先蹤をなしている。もつとも、両詠とも発想的には貫之の「藤の花もとり見ずはむらさきにさける松とぞおどろかまし」（貫

之集¹²⁹ 延喜十九年（九一九）東宮御息所屏風歌」と親しく、当該歌はこの歌からも表現撰取を行なっている可能性が強いが、上述したように「紫の…藤」「松の…緑」という枠組によって一首を構築するという手法自体は(26)の躬恒歌から学んだものではないだろうか。

（七月七日、をむなにはにおりゐてたなばたまつ
をとこ（坊仙雅）まがき（坊続仙雅）
をときてすいかいのもとにたてり

② たなばたにけさはかしつるあさのいとをよるはまつる
と人はしらずや（順集・285）

言うまでもなく当該歌の上三句は、躬恒の

上・179・(躬恒)
恋やわたらん(躬恒集 I 31 II 205 III 122 IV 456 / 古今集・秋
(20) たなばたにかしつるいとのうちはえてとしのをながく

の一首に依拠していよう。

②② 秋のよ、月あかき はやし 坊統仙雅 のもとに しかたてり
月をあかみ坊統仙雅 つきあかきこよひぞかずはかぞへつるつねもしかた

つ木とはみつれど（順集・289）

にしても、初句について他系統の「月をあかみ」の本文を採用すれば、

⑳月をあかみおつるもみぢのいろもみゆちりおとのみは

きこえざりけり（躬恒集IV 261）

からの摂取が予想されよう。「月をあかみ」の歌句例は平安和歌では右の二首を見出すに過ぎず、順・躬恒両詠の表現の親しさが改めて看取されよう。

以上、本節では順の歌合歌・屏風歌について躬恒歌との影響関係を探ってきた。歌合歌に関しては㉑の一首を挙げるとどまつたが、順の歌合出詠歌の総数自体が五首、撰外歌一首であることを考慮すれば当然の結果であろう。屏風歌では天元二年内裏屏風歌に限ってその傾向が顕著に認められたが、これは本屏風歌の詠作に際して順が躬恒歌を規範とし、その和歌表現を意欲的に摂取しようとした歌作態度のあらわれとみてよいであろう。ではなぜ、本屏風歌に集中して見られるのであろうか。

本屏風歌が詠進された天元二年当時、順は散位九年目に

して任官への焦燥感をいよいよ募らせていた。第一節で挙げた㉓「ほどもなきいづみばかりにしづむ身はいかなるつみのふかきなるらん」の一首は、本屏風歌の詠進に際して「おほせごとのたぶる蔵人につかは」したものである。右歌にみる「いづみ…に沈む」の詞句が、実は上掲躬恒の(1)から摂取されたと思しいことは先述したが、晩年の順がこの詞句をキーワードのように用いていたのは、やはり自身と同様、前和泉国司のまま沈淪を余儀なくされた先輩歌人躬恒に対する共感が心底にあつたからだと思われる。第三節で述べたように、順はかねてより躬恒を遊戯歌の先達として評価していたふしがあるが、晩年はさらに躬恒その人への敬慕の念も加わり、自ずと躬恒の歌に親しむ機会が多くなつていったのかもしれない。ゆえに、本屏風歌の詠作において躬恒歌の表現が多く摂取されることとなつたのはなからうか。

ちなみに、順最晩年の作となる永観元年（九八三）藤原為光家障子歌では、躬恒歌との直接的な影響関係は窺い得ない。本歌群に見る十一首の歌はもはや老境ともいふべき淡々とした詠みぶりで、躬恒歌に限らず先行表現を巧みに

撰取しつつ新たな歌境を開拓しようという気概は殆ど感じられない。おそらく、天元三年（九八〇）にようやく能登守に任ぜられ離京した時点で、順の創作意欲はその瘦軀とともに衰えていったものと思われる。

五

本稿では源順と凡河内躬恒との和歌表現の関連性を順の側から探るとともに、躬恒その人に対する順の意識についても考えてみた。その結果として、次のようなことが指摘された。

(一) 順が沈淪愁訴歌などではしばしば用いている「いづみに沈む」という詞句は、躬恒歌(1)から撰取された可能性が強い。

(二) 順と躬恒の作品には「沈む」の語が多出するが、その用法を比較すると、ともに遊戯的・技巧的側面から同用語を捉え、ある種の表現効果をねらおうとする意図が共通して認められる。順の沈淪愁訴歌の詠法は、おそらく躬恒歌のそれを規範としているのではなからうか。

(三) 順の特殊歌には躬恒歌からの表現撰取を予測させる歌

作がまま見られるが、それは遊戯性の強い躬恒の詠風を庶幾していた順の歌作姿勢のあらわれと考えられる。また、順は輔相のみならず躬恒に対しても遊戯歌の先達として畏敬の念を抱いていたのではなからうか。

(四) その他の順歌においても同様に躬恒歌からの影響が看取されるが、とくに天元二年内裏屏風歌ではその傾向が顕著であり、(一)(二)の指摘とあわせて順が散位時代とくに躬恒の歌作に親しんでいたことを窺わせる。晩年の順は自身と同様「いづみに沈む」という辛苦を味わった躬恒に対して、深い共感をも抱いていたように思われる。

以上のように、順と躬恒についてはその経歴のみならず和歌表現の面においても多くの共通点が見出された。しかしながら、両者は元来その文学的素地を全く異にしているということもまた忘れてはならない。躬恒は和漢兼作の作品なども残してはいるが、それはあくまでも余技であり、彼はやはり生粹の歌詠みであつたといつてよからう。一方、順は歌人としての業績も少なくないが、彼の文学の原点は言うまでもなく漢詩文に求められる。躬恒が「時折すばらしい名歌を物」したのに対して、順がさしたる名歌

を残し得なかった理由は、そうした文学性の違いに根ざしているのではないだろうか。

なお、今回の考察では「源順百首」と躬恒歌との関連について言及する機会を逸したが、私見では若干の影響関係は認められるものの、特筆すべき現象とは見なし難いようである。⁽²⁵⁾ また、本稿で掲げた(1)～(7)の躬恒歌のうち、(14)・(17)・(19)・(21)・(23)の家集所載歌六首が『古今六帖』に採られていることも興味深いが、その点については他日を期して改めて考察したい。

注

(1) 以下、『順集』の本文は西本願寺本の複製である『西本願寺本三十六人家集』およびその断簡を網羅した小松茂美氏『古筆学大成』に拠り、欠脱箇所は宮内庁書陵部蔵『歌仙集』(511・2)を用いた。歌番号は『私家集大成』中古Ⅰ「順Ⅱ」のそれに従い、私に清濁、句読点を施し、適宜異文本文を注記した。また、各系統を代表する諸本の名称は以下の略称をもって示した。冷泉家時雨亭文庫蔵坊門局筆本(『冷泉家時雨亭叢書第十六卷 平安私家集 三』平7 朝日新聞社の影印に拠

る)：坊、書陵部蔵「続小草内和歌」(501・49)：続、正保版本歌仙家集：仙、書陵部蔵「御所本三十六人家集」(510・12)：雅。

(2) 藤原季孝下総守任官の時期ははっきりしないが、『小右記』では寛和元年(九八五)正月二十二日条に「下総守季孝」、同年三月二十二日条に「季孝朝臣」、同年三月二十七日条に「播磨介季孝」とあり、『日本紀略』では同年四月五日条に「播磨介藤原季孝朝臣」、寛和二年正月条に「前下総守藤原季孝」とある(榎野廣造氏『平安人名辞典—長保二年—』平5 高科書店を参照)。「小右記」の官職記載を信ずれば、季孝の下総守任官は高島氏注4論文が指摘するように天元三・四年(九八〇～一)ということになるうか。また、坊・続・仙本では「中納言中宮大夫」とあるが、これは元来「中納言」^{中宮大夫}などあつた傍書が、本行部分を残した形で本行に取り込まれた転化本文と考えられる。雅本は「中宮大夫」のみの本文だが、おそらく本行の「中納言」に代って傍書本文を採用した形であろう。順の散位時代、中宮大夫の職にあつたのは藤原為光で、天延元年(九七三)七月一日より天元二年(九七九)六月三日まで在職(公卿補任)。先の季孝下総守任官の時

期と幾分ずれるが、季孝の任官が天元三年以前であったことも考えられなくはないので、当該歌の詠作年時はひとまず天元二年頃と推定しておく。

- (3) 「さきのいづみのかみみなもとのしたがふの朝臣なむ、おほやけになしつばの五人がうちにめされ…」(規子内親王前裁歌合序〔天禄三年八月二十八日〕、「但有_レ好_レ学無_レ益者」。前泉州刺史順也。一生貧而樂_レ道、徒繼_レ原憲之前蹤_一、九年沈_レ於散班_一…」(本朝文粹・卷十・307「暮春陪_レ上州大王池亭_一同賦_レ渡_レ水落花来_一各分_一一字_一応教」〔天元二年〕、「前和泉守順の君の、官たまはらで、近江のやすのこほりにあるにいひやる」(安法法師集16)。

- (4) 高島要氏「文人・歌人としての源順」(『石川工業高等専門学校紀要』10号 昭53・3)では「泉州刺史」であつたことの「泉」と沈淪の身を嘆く「沈む」とは縁語、掛詞の技巧の妙を尽くして、源順の和歌に、あるいは散文に一つのパターンをすら作ることになる」と指摘している。

- (5) 高島氏注4論文参照。
(6) 原田真理氏「源順 不遇感とその背景」(『平安文学研究』70輯 昭58・12) 参照。

- (7) 以下、和歌の引用は断りのない限り、勅撰集・私撰集は『新編国歌大観』、私家集は『私家集大成』に拠つた、歌合は萩谷朴氏『平安朝歌合大成』に拠り、表記を原本の形に改めた。なお『万葉集』の歌番号は旧国歌大観番号を用いた。

- (8) 順は屏風歌詠作に際して貫之の屏風歌表現をしばしば摂取している。拙稿「源順の歌風について」源高明大饗屏風歌を中心に」(『古典論叢』22号 平2・8)「後撰集時代の屏風歌―貫之歌風の継承と新表現の開拓―」(『和歌文学論集』5 屏風歌と歌合) 平7 風間書房)においてその一端を指摘した。

- (9) 『躬恒集』の用語検索に際しては、滝沢貞夫・酒井修氏「校本凡河内躬恒全歌集と総索引」(昭58 空閑書院)を用いた。また、同集の読解に際しては、主に峯岸義秋氏「平安時代和歌文学の研究」(昭40 桜楓社)、「和歌文学大系19 貫之集 躬恒集 友則集 忠岑集」(『躬恒集』は平沢竜介氏校注・解説 平9 明治書院)を参酌した。
- (10) 『私家集大成』中古I「躬恒」解題、徳原茂美氏「躬恒集第一類本成立考」(『和歌文学研究』55号 昭62・11)、「和歌文学大系19」参照。

(11) 「後撰集時代前後の和歌と白樂天」(中央大学国文) 37

号 平6・3)、「元輔集」と同時代和歌―漢詩文表現の浸透度を中心として―(『和歌文学研究』71号 平7・12) 参照。なお、小野氏は上掲『元輔集』dについてあわせて同故事からの影響を指摘する。

(12) たとえば、

などかかうのは夏草に|しげれどもかりにとなくに
ゆく人もなき(統226・卯花)

やまものもなつく|きしげくなり|にけり|などかまだ
しきやどのかるかや(西12・あめつちの歌・春)

おもふには人をも|なにかうらむ|べきつらきを|し
てこふるばかりぞ(統248・庭火)

えも|せかぬ|なみだのかは|のはて|くやしひて恋し
きや^{やまる}まは^秘つくはえ(西46・あめつちの歌・恋)

つの国^なには|づしも|ぞなの|みして|とまり|もとむ
る船もよりこぬ(統245・初霜)

へにかよふるいの|きしより|ひくつなで|とまりは
こ、とつげよなにはえ(西63・雙六盤歌)

など。本物名歌が「あめつちの歌」「雙六盤歌」と表現的な親しさを見せている点は、これらの特殊歌群がほぼ同時期に作られたことを示唆しているように思われ

る。

(13) 順は一部の屏風歌や特殊歌群において、『古今六帖』出

典未詳歌より積極的な表現摂取を試みている。この点については和歌文学会平成九年七月例会(於 駒沢大学)で「源順歌の表現―古今和歌六帖」歌との関連―と題して発表した(副題を「古今和歌六帖」出典未詳歌との関連―と改め『和歌文学研究』76号 [平10・6 発行予定] に掲載)。

(14) 拙稿「源順歌の表現―万葉歌との関連をめぐって―」

(日本大学人文科学研究所『研究紀要』44号 平4・9)。

(15) 拙稿「源順と後撰集―順は後撰集編纂に關与したか―」

(『語文』93輯 平7・12) では、「あめつちの歌」の詠作時期を物名歌が詠まれた天曆十年頃から好忠百首が成立した天徳末年(九六〇)頃までの間と推定した。

(16) 「高遠集」に「たにがはのしたのころしにこれ、ば人

をこひちにすまずとぞきく」(128、或人の絵料歌、をむなのかちするほうしの、ころあはせてあふところ)

の一首を見るが、高遠(天曆三年〔九四九〕―長和二年〔一〇一三〕)の歌歴を考えれば、右歌の詠作時期は当該歌よりも随分下るものと思われる。

(17) 「躬恒の歌試論」(小沢正夫氏編『三代集の研究』昭56明治書院) 参照。

(18) 「躬恒 歌作り一面」(森本元子氏編『和歌文学新論』昭57 明治書院、後に『古今和歌集の研究』平3 明治書院に収載) 参照。

(19) 萩谷朴氏が「平安朝歌合大成 二」で指摘されているように、躬恒の物名歌と本歌合との関連については早くに伴信友が「源順家馬名毛名歌合注」の中で言及しており、萩谷氏は「躬恒・順共に当意即妙の吟を得手とする作者に見られる共通現象であることも面白い」と述べておられる。

(20) 拙稿「源順の歌風について―天元二年内裏屏風歌を中心に―」(日本大学第三高等学校『研究年報』26号 平2・9)

(21) たとえば「よのなかのつねなきをみて、万葉集のなかなる沙弥満誓が歌をもとにて、しものくをくはへて、したがふ、時文などしてよみはべりし」(能宣集I 242-253)などの試みは、この恋三十首歌をも念頭に置いたものではなからうか。

(22) 片桐洋一氏『拾遺和歌集の研究 伝本・校本篇』(昭45 大学堂書店)に拠れば、定家本系統と異本第一系統で

はこの歌の詞書は記されず、したがって1069番歌の「左大臣むすめの中宮のれうにてうじ侍りける屏風に」の詞書内容を受ける形となっている。ただし、異本第二系統の京都市北野天満宮本では「題不知」とあり、おそらくこちらが原態に近いものと推察される。作者が「読人しらず」とされている理由については知られない。底本の「月あかき」にしても平安和歌では他に例を見ない歌句である。

(24) 注18片桐氏論文参照。

(25) たとえば、源順百首の「かをとめてうぐひすはきぬたなびきてかくすかひなしはるのかすみは」(好忠集I 535・沓冠歌)が、上掲躬恒の詞を踏まえていることは自明であろう。ただし、百首歌そのものの表現性を勘案すれば、惠慶百首の「かをとめてわれはむつぶるあやめぐさよそめにこまのみるがあやしき」(惠慶集・251・沓冠歌)に呼応する形で詠まれている可能性もある。

〈付記〉本稿は平成九年度上田女子短期大学研究助成費にもとづく研究成果の一部である。

